

序
3

第一章 「サクロ・モンテ」の定義と研究史

一 「サクロ・モンテ」の定義 10

一―一 アルプス以南（主としてイタリア）の定義 10

一―二 アルプス以北（主としてドイツ語圏）の定義 18

一―三 本書における「サクロ・モンテ」の捉え方と時代的適用範囲 23

二 イタリアのサクロ・モンテ研究史 28

二―一 二〇世紀末までのサクロ・モンテ研究 28

二―二 アルプス以北のカルヴァリオ山や十字架の道行き研究と

近年のイタリアにおけるサクロ・モンテ研究 32

二―三 日本におけるサクロ・モンテ研究 37

第二章 一五世紀以前の西欧におけるエルサレムの模造建築

はじめに 48

一 キリスト教徒のエルサレム憧憬とその模造の伝統、並びにサクロ・モンテの関係 48

二 一四世紀以前のエルサレムの模造建築 51

二―一 エルサレムの聖墳墓の祠堂と復活聖堂の変遷 51

二―二 一四世紀以前の「模造（＝代用）墓」と「模造（＝代用）アナスタシス」の建造例 55

三 一五世紀のエルサレムの模造建築 65

三―一 旧来型のエルサレムの模造建築のその後の展開 66

三―二 複数の模造建築からなる複合的「代用エルサレム」の登場 76

三―三 連続する「留」^{スチオオ}（りゅう）によるエルサレムの新たな模造体の出現 87

結び 111

第三章 ミラノ管区ヴァラツロのサクロ・モンテ

——フラ・ベルナルディーノ・カイーミの「代用エルサレム」

はじめに——現在のヴァラツロのサクロ・モンテと問題点 122

一 ヴアラツロの初期の施設に関する先行研究 123

二 最古の巡礼案内書に言及されている礼拝堂とミステーリ 129

三 一五二四年の案内書に挙げられた礼拝堂の設置場所の同定 136

四 一五二四年の案内書の礼拝堂群とエルサレムの「キリストゆかりの聖蹟」 168

五 フラ・ベルナルディーノ・カイーミの「代用エルサレム」——結びにかえて 177

第四章 トスカーナ管区サン・ヴィヴァルドのサクロ・モンテ

——フラ・トンマーゾ・ダ・フィレンツェの「代用エルサレム」

はじめに 192

一 レオ一〇世の返書と先行研究の問題 195

二 検討史料群と同定問題の再検討 199

二―一 紹介済みの史料と新たな検討史料 199

二―二 同定問題の再検討 211

三 フラ・トンマーズ・ダ・フィレンツェの地形模倣的「代用エルサレム」 214

四 地形模倣的「代用エルサレム」から「サクロ・モンテ」へ——結びにかえて 231

第五章 形態の変遷から見たイタリアのサクロ・モンテと

その他の巡礼施設の展開

はじめに 254

一 サクロ・モンテ隆盛の背景 254

二 トレント公会議後の巡礼施設——「サクロ・モンテ」の諸類型と展開 258

二―一 ヴアラツロとサン・ヴィヴァルドの「代用エルサレム」の変容 258

二―二 改造中のヴァラツロの「代用エルサレム」の影響下に建造されたサクロ・モンテ群 266

二―三 定着した祈りや信心に則した規則的な礼拝堂の配列をもったサクロ・モンテ 272

二―四 諸類型の総括 302

三 南チロル（トレンティノーリアルト・アディジェ州）の「カルヴァリオ山」 303

三一 研究・紹介の現状 303

三二 カルヴァリオ山とは 304

三三 現存する具体的建造例 305

三四 カルヴァリオ山の総括並びにサクロ・モンテとの類似点・相違点 315

結 語 323

謝 辞 327

参考文献 (20)

初出一覧（対照表） (18)

図版出典 (13)

索引 (1)

Sample

サクロ・モンテの起源——西欧におけるエルサレム模造の展開

Sample

序

今日、発生地のイタリアでの呼称によって一般に「サクロ・モンテ」（聖山）と呼ばれている近世の巡礼施設は、具体的には、山や丘の頂上か斜面上の限定された屋外空間（図1、2）に、一連の礼拝堂や聖堂、修道院などの宗教建築を擁しており、十字架ツヴァークルースの道行きや聖なる道行きツヴァークルースなどの別の一連の信心業用の小複合体を併設していることもある。そして一連の礼拝堂内では、キリストの生涯や受難、あるいは聖母マリアや聖人の生涯などに関係する聖なる場面が、巡礼者を物理的かつ心理的にそれらの場面へ巻き込むために、きわめて表現力に富む絵画とまるで生身の人間のように見える等身大のそれぞれ独立した群像彫刻（レリーフの場合もある）によつて演劇的に表現されている（図3）。

しかし、「サクロ・モンテ」に対する解釈は一樣ではない。より現実的、歴史的な意味で、それをエルサレムの模造建築の一種と見做す者もあれば、異教徒による迫害のために困難になった聖地パレスティナへの実際の巡礼に代わる代用巡礼施設、あるいはプロテスタントに対するカトリックの要塞と捉える者もある。また靈性史的立場から、中世に説かれ流布した靈的ないし心的巡礼を具体化したものとする者もある。さらに、より根本的象徴的な意味で、修道士のためにではなく、多くの巡礼者や悔悛者をキリスト教徒の最終目的地である「天のエ



図1 ヴァラッロのサクロ・モンテの聖域を囲む壁体（右方に創設当初の古い入口、左方に改造期に造られた壮麗な入口がある）

ルサレム」へ至らせるために、天と地が出会う場所である聖なる山に聖地（地上のエルサレム）を再現したり、聖なる頂へ導くための聖道を接続したりした、カトリック的、芸術的、とりわけ苦行的な近世の巡礼施設と解釈する者もある。このような多様な解釈は、それぞれがサクロ・モンテの前身から発生、発展という一連の過程のうちの一面なしいしは一時期に着目したために生じたことであり、サクロ・モンテは、逆に言えば、そうした解釈のすべての要素を内包するものと言うことができる。つまり、中世までの西欧の聖地模造や実際の聖地巡礼と霊的巡礼の伝統を受け継いで生まれ、カトリック教会の意向と北イタリアの宗教的諸事情の中で独自の近世的形態を獲得して発展した巡礼施設と捉えられよう。

史（地理）、カトリック教会史、創設者が属していた修道会（フランシスコ会やカプチン会など）史、並びにキリスト教神秘主義思想的側面などからアプローチがなされ研究が積み重ねられてきた。その結果今日では、重要な施

このように歴史性や象徴性、芸術性を帯びた魅力的なサクロ・モンテについては、イタリアのものに限ってみても、これまで世界中の研究者によって、美術史や建築史、歴



図2 緩やかな斜面上に礼拝堂が並ぶオローバのサクロ・モンテ

設については、その歴史的全体像はかなり明瞭に映し出されている。また、その他の大小のサクロ・モンテとの関係やサクロ・モンテ全体の歴史的展開などについても的確な位置付けや跡付けがなされるようになった。しかし、第一章で検証するように、イタリアを除く西欧の国々、

とりわけアルプス以北の国々では、すでに二〇世紀初頭から「カルヴァリオ(山)」や「十字架の道行き」などの研究(イタリアの施設も言及されている)において、西欧近世の巡礼施設を総合的に取り上げる傾向が見られるのに対し、イタリアでは、国内のサクロ・モンテと西欧のその他の国々の類似施設を総合的に扱う研究は、近年ピエモンテ州サクロ・モンテ・デイ・クレアの資料センターが開始した大規模で画期的な調査・研究の試みまでまったく見られなかった。それどころか今日に至っても、イタリアのサクロ・モンテをイタリアに固有なものとして見做し、西欧のその他の国々のエルサレムの模造建築や類似施設と一緒に考察するのを批判する研究者もいる。しかし、サクロ・モンテに関する重要な問題の中には、イタリア国内にのみ因を求め、でも説明しがたく、西欧全体ないしは欧州全体に視野を広げて考察する必要があるものもある。



図3 ヴアラッロのサクロ・モンテの第37堂《十字架への釘付け》の堂内装飾の一部

大小の礼拝堂の全体的配列（Ⅱ形態もしくはは類型）や、その形態を構成している個々の礼拝堂の建築的要素に着目し、それらを、同時代の西欧のその他の国々の類似の施設や、先行する時代の同じような意味を帯びた建造物な

本書で取り組む「サクロ・モンテ」の起源の問題も、著者によれば、そのような問題の一つである。その発生については、これまで、対抗宗教改革的理由やフランシスコ会との関係、また、巡礼形態の変化などが理由として挙げられてきた。そして特に、堂内に設えられた壁画と群像彫刻による迫真的な玄義場面の起源については、中世末期に隆盛した聖劇や、北イタリアに散見されるトラメッツォ上に描かれたキリストの受難を主題とした壁画、アルプス以北において四旬節に主祭壇を隠すように吊り下げられるフラスンドゥワフ大布、イタリアでも流布したことが明らかでないデューラーを筆頭とするアルプス以北の版画家による受難伝シリーズ、さらにはフランス南部からイタリアのエミリア・ロマーニャ州やトスカーナ州にまで広く遺例が残るキリストの「埋葬」、ミントシボないしは「ピエタ」を主題とする極めて表現主義的な一五世紀の等身大の群像彫刻などからの影響が指摘されている。しかし、サクロ・モンテを構成している

どと比較、検証しながら、サクロ・モンテの発生や展開を考察する試みは管見の限りまだなされていない。もちろん、先行する時代にエルサレムとの関係で建設された西欧の建造物を紹介した研究がイタリアにまったくなかったわけではない。しかし、存在するその僅かな論考も、そうした建造物とイタリアのヴァラツロとサン・ヴィヴァルドのサクロ・モンテの「代用エルサレム」時代の形態とがどのように関係しているのかまでは明示していない。

そこで本書では、一五世紀以前のエルサレムの模造建築の模造方法や構成要素の変遷、模造法に変化を生じさせた背景などを西欧的視野のもとに概観することによって、また、旧来のイタリア的方法に反し、同時代の西欧（とりわけアルプス以北）のその他の国々の類似の建造物や施設を比較、検証の対象にすることによって、ヴァラツロとサン・ヴィヴァルドの「代用エルサレム」（後代の「サクロ・モンテ」の手本）の形態の発生の問題にアプローチしてみたい。本書の展開としては、まず第一章で「サクロ・モンテ」等の用語についての批判とイタリアのサクロ・モンテ研究の流れについての概観を行う。そしてその後で一五世紀以前の西欧における聖地パレスティナととりわけ聖都エルサレムの模造法についての概観に入る。次いで第三、四章で数世紀を経るなかで変形を被ってしまった現在のヴァラツロとサン・ヴィヴァルドのサクロ・モンテの初期の形態を明らかにし、それによって、両施設の初期の形態が西欧のその他の国々（特にアルプス以北）の一五世紀以前のエルサレムの模造建築や複合体と無縁ではないと同時に、その他の国々の複合体にはない独自性をも備えていることを示したい。そして最後に、両施設のその後のサクロ・モンテへの形態的变化と、トレント公会議以降アルプス南麓に次々と建造されるようになったサクロ・モンテの隆盛の様子を、主にそれらの形態に着目して跡付けてみたい。

結 語

終始巡礼の実践によって貫かれていた中世西欧のキリスト教徒にとって、巡礼は生活の象徴的な瞬間を意味していた。当時、聖地は、パレスティナのエルサレム、イタリアのローマ、そしてスペインのサンティアゴ・デ・コンポステラであったが、これら三大聖地のうち神の存在の物理的痕跡や聖蹟、またキリストの歴史的事実性の故にキリスト教徒にとってとりわけ重要であった（ある意味では現在も）のは、エルサレムであった。この聖地パレスティナへの巡礼の歴史は古く、四世紀前半にコンスタンティヌス大帝によって町の宗教的設備が再建された直後に遡るが、とりわけ一〇世紀以降は、巡礼の数が全体的に増え、エルサレムへの巡礼もサンティアゴ・デ・コンポステラへのそれと並んでますます頻繁に行われた。しかし一三、一四世紀になると、十字軍は所期の目的を達せられないまま失敗に終わり、異教のトルコ帝国の勢力は再び拡大した。またヨーロッパでは、農業が発展して人々の日常生活が次第に改善されていくなか、聖体の秘蹟に対する信仰が普及した。さらに、フランシスコ会士はキリストの受難に対する信仰を煽って都市を一時的にエルサレムに変貌させるのに成功し、神秘主義者は日々の生活を送るなかで個々人の中にエルサレムのキリストを探すことを説教や著作によって説いた。こうして、危険を冒し大金をかけてまでエルサレムに巡礼する必要性は次第に失われていった。

このような状況のなかで、危険な長旅を敢行できない者にも巡礼の機会を提供し、巡礼の意味を後世に伝えることを目的に代用巡礼が導入されるようになった。従って居住する地域の近くにある巡礼地サンチユリアへの巡礼や奉納行為は、一五世紀にあつてはエルサレム巡礼の代用を意味していた。このようなエルサレムと代用の巡礼地との関わりは、そこに何らかの特別な聖遺物（聖地からの請来品であればなおさらよい）が収められているか、建造物の外観や献堂名に聖地パレスティナを偲ばせるものが含まれていればますます強められることになった。聖なる建造物や聖なる品々の多くが言わば聖地の象徴的模造品や聖遺物であるヨーロッパでは、キリストゆかりの聖蹟を何らかの形で模し再現するという願いは、コンスタンティノポリスやローマ、ポローニヤ等で早くから具体的な形をとって表現されていた。そして九世紀を過ぎると、第二章で見たように、エルサレムの聖墳墓（キリストの墓）や円形プランの復活聖堂を記念あるいは模造した祠堂や小神殿が西欧全域で建造されるようになった。しかし、一四世紀までの西欧の模造建築は、聖墳墓か復活聖堂あるいはその両方を模造するに留まっていた。これに対し、一五世紀に入ると、模造対象の「複数化」ないしは模造体の「複合化」傾向が見られるようになり、新しいタイプの一種の靈的模造体もアルプス以北に出現し始めた。後者は、キリストの受難に対する特殊な諸信仰を実践するための複数の留からなる一種の十字架の道行きであった。

北イタリアのヴァラツロと中央イタリアのサン・ヴィヴァルドに、それぞれ一五世紀末と一六世紀初めに着工された代用の巡礼地、すなわち「代用エルサレム」とは、以上のような西欧におけるエルサレム模造の探究の最終的な発展形態であったと考えられる。しかし、「サクロ・モンテ」の起源や成立過程を、まずはその初期の形態である代用エルサレムに遡り、西欧の長い聖地模造の歴史に照らして納得のゆく形で示してくれた論考は存在していなかった。そこで、模造対象の数や模造の規模の変化に留意しながら、西欧におけるエルサレム模造の展

開を辿ると同時に、イタリアの二つのサクロ・モンテの初期の形態（Ⅱ代用エルサレム）を平面図上で明らかにすること、一五世紀までの西欧におけるエルサレム模造の展開とイタリアの二つの「代用エルサレム」の誕生が決して無縁ではないことを示そうと試みたのが本書である。

我が国では、サクロ・モンテは未だ十分に紹介されているとはいえない。しかし、ピエモンテとロンバルディア両州の主要なサクロ・モンテが二〇〇三年に群としてユネスコの世界遺産に登録されて以降、認知度は高まりつつある。また、第一章二節三項で紹介した日本の優れたバイオニアたち、とりわけ近年の気鋭の女流研究者たちが発表、刊行したヴァラッロのサクロ・モンテに関する諸論考や研究書が、ピエモンテの「山の劇場」の周知に大いに貢献しており、今後はそれらに啓発された志ある若い学徒たちが同地やその他の未紹介の遺例の調査、研究をさらに推進してくれるに違いない。

拙著は、平成一五（二〇〇三）年度に筑波大学に提出した課程博士論文の原稿と、その複数箇所を独立させて提出前後に発表した複数の論考のテキストや図版を照合しながら加除し、それらにさらに修正を加えたものである。学位論文の提出時からはや一四年の歳月が流れ、その間にサクロ・モンテを構成している礼拝堂を主とする建造物や堂内の彫刻や壁画といった芸術作品の修繕や修復が進み、同施設群の管理や運営体制も変化した。例えばピエモンテ州では二〇〇九年に、経費節減と再編成を目的として、州法（no.19）により、クレアのサクロ・モンテを登録事務所とする「サクロ・モンテ管理運営財団」（Ente di gestione dei Sacri Monti）が創設され、それまで個々の地方自治体等が管理してきた各サクロ・モンテが同財団のもとに統合（ベルモンテ、クレア、ドモドッソラ、グイッファ、オローパ、オルタ、ヴァラッロの七施設）された。また、各施設の名称も、「特別自然保護区十各サクロ・モンテ名」（Riserva Naturale Speciale + nome del Sacro Monte）から、「特別保護区十各サクロ・モンテ名」（Riserva Speciale +

nome del Sacro Monte) に改称されるに至った。しかし、そうした変化は本書の論旨の展開にはほとんど関係がなく、稿を改めて紹介すべきことであるし、欧米における最新の研究傾向にも管見の限り大きな変化は認められない。それゆえ本書では、時間と紙幅の制約もあり、主として平成一六年度以降に日本で発表、刊行された論考や著作を加筆するに留めた。

このように本書は、ここ十数年のサクロ・モンテをめぐる状況の変化や欧米の研究に関する情報を十分に補ってはいないが、最新の諸研究にすら拙著と同様な視点でサクロ・モンテの起源の問題にアプローチしたものは見出されない。従って、遅きに失した感は否めずとも、拙著の刊行は今なお意義があることのように思われる。本書が、日本における既刊の僅少な研究書や論考とともに、今後のサクロ・モンテ研究やキリスト教における代用巡礼研究、さらには学際的な視野の下、世界の諸宗教における巡礼や代用巡礼に関心を抱く専門諸氏に、多少とも新しい情報や知見を提供できるならば望外の喜びである。また、著者の非力ゆえに十分に論じ尽くせていない箇所や思わぬ誤記があるかもしれない。併せて専門諸氏のご指摘やご教示、ご寛恕を乞う次第である。

Sample